

渥美郡三町 の時代

其の6

郷土史編さん室 36局6503



網入れ後、約8馬力の焼き玉エハジンを搭載した4トンほどのチリメン網用の木造船2隻か4隻で岸近くまで網を引いてきます。その後、ろくろを使つたり、人の力や牛を使つたりし、沿岸流に合わせて半日ほどかけて網を揚げました。時には大きな袋にサバやイワシがいっぱいに入り、重くて引き揚げられないこともあります。そんなときは、波が寄せるのに合わせて袋を転がして揚げました。左の写真では、どの漁師も全身赤銅色でたくましく、麦わら帽子や鉢巻きをし、ふんどしかパンツ姿で網を引いています。沖の船

は2隻で組になつてチリメン網漁をしています。
イワシは煮干にしたり、生のまま砂浜に干して干鰯にしたり、肥料にしたりしました。

田原湾の漁業 ノリとアサリの大産地

昭和41年に漁業権を放棄するまで、田原湾ではノリ養殖やアサリ漁が盛んに行われていました。

当時のノリ養殖は、海に刺した竹に長さ18メートル幅1・4メートルほどの網を張り、ノリが育つのを待ちました。左の写真のように、一面にノリ網が張られていました。ノリは養殖場所によつて付き方や品質に差

がでるため、平等になるように、場所割りをし、くじで決めていました。浅い所では長靴でも仕事ができました。が、場所や潮時によつては、鉄下駄を履き胴長をつけ、冬の海に胸まで浸かつてノリを摘むことありました。摘んだノリは手回しのチョッパーで細かく切り、簀の上に薄く流した後、簀を木製の枠に刺して天日干しにしました。一日に1000枚から1500枚ほどの生産量で、アサリのむき身とともに大切な現金収入源でした。

昭和42年に工業用地の埋立てが始まる、ノリ養殖もアサリ漁も急速に姿を消しました。

(執筆委員・伊藤博文)

今月の 表紙

▼アジサイの花言葉は、
移り気などマイナスイメージの言葉が有名ですが、辛抱強い愛、団結といった言葉もあります。小さな花が寄り添つて一つの花を作り、土の色によつて花色を変えるアジサイ。親が子どもを想い寄り添う姿を連想させました。(O)

地引網漁とチリメン網漁
昭和30年代の表浜では、地引網漁とチリメン（シラス）網漁が盛んに行われていました。昭和27年の記録には、久美原から越戸までに36統の地引網がありました。

地引網にはほうべからいのみ（魚群）を見つけて網を入れる前網（おかみ）と沖合2～3キロメートルほどから網を入れる沖網がありました。昭和30年代、主に行われていたのは沖網。



●地引網(赤羽根海岸／昭和30年代)



●ノリの収穫(浦の大洲崎／昭和40年)

【表紙の写真】滝頭公園のアジサイ